醫學校圖書之印

備中國淺口郡大島村津雲貝塚發掘報告

島田貞彦
醫學博士 清野謙次
梅原末治

第一章 發掘

第一節 貝塚發掘の略史

備中國淺口郡大島村大字名切に於ける津雲貝塚は、河內國府、陸前宮戸島、肥後阿高、同轟貝塚等と共に、石器時代の人骨群の發見地として、近時學界の耳目を聳動せし處にして、其發掘の人骨數に至りては、從來本邦諸遺跡中實に第一位を占む。今津雲貝塚に於ける人骨發見の由來と發掘の次第とを略述せんに、明治三年該地方に堤防工事の施工せられ、貝塚東端の土壤を運搬せし際に、多量の土器、介殼及び人骨破片等の出現せるを以て嚆矢とす。其後大正四年二月、東京帝國大學の鳥居龍藏氏[1]此地に來りて小發掘を試み、土器、介殼獸骨片等を採集して其貝塚なる

ことを學界に紹介せしも、人骨は之を獲ること能はざりき。次で同年六月、京都帝國大學教授理學博士小川琢治(2)氏は此の地方を訪問して、松枝惣十郎氏の採集せる貝塚發見の人骨を視て、其研究價値を認め、當時同學助手たりし文學士內田寬一氏を特派して發掘を行はしめ、內田氏は人骨二體を京都帝國大學に携歸したりき。同五年、東北帝國大學の理學博士松本彥七郎氏はまた其地を過ぎりて既掘の人骨數體を得て、其の研究を發表し、該貝塚發見の人骨に對し「津雲人種」の名を以て命せり。爾來、大阪醫科大學教授醫學博士大串菊太郎氏、東北帝國大學教授醫學博士長谷部言人氏等によりて、屢々その發掘調査行はれ、每次多大の新發見ありしが、更に京都帝國大學助教授醫學博士清野謙次氏は、大正八年九月以降、翌九年一月の間に三次の發掘を企て、約六十六體の人骨及び多大の共存遺物を發見するに至れり。

今、年次に從ひ主なる發掘者の人名及人骨數等を擧ぐれば左の如し。

人名	發掘年次	人骨數	圖版第二對照符號
鳥居龍藏	大正四年二月	〇	TO
松枝惣十郎	大正四年三月	五	MA_1
內田寬一	大正四年六月	二	UC
松枝惣十郎	大正四年十一月	四	MA_2
同	大正五年九月	八	MA_3
服部照次	大正六年	?	HIT
弘津史文	大正七年二月	一	H
大串菊太郎	大正七年三月	一	OG_1

大串菊太郎	大正七年七月	四	OG_2
松枝惣十郎	大正七年九月	三	MA_4
同	不詳	二	MA_5
大串菊太郎	大正八年七月	十一	OG_3
長谷部言人	大正八年八月	二	IIA_1
清野謙次	大正八年九月	十一	A.B.……
同	同	卅三	I.II……
長谷部言人	大正八年十二月	廿二	IIA_2
清野謙次	大正八年十二月—九年一月	廿二	a.b……
大串菊太郎	大正九年五月	卅五？	OG_4

其人骨の數量に於いては河内國府を凌駕し、古代人類比較に關する資料として、津雲貝塚は實に無比の寶庫と云ふ可し。只從來松本博士の報告を除きては、新聞紙上に記載されたる斷片的の記事に止まるを憾とす。今や清野博士が這般人骨發掘の報告を公にするに臨み、余輩は同氏の津雲貝塚發掘の經過と、其の發見遺物に關して之を叙述せんと欲す。(3)

【註】(1)鳥居龍藏氏は大正四年二月、遺跡調査の目的を以て備中國淺口郡神島へ出張の際、同行せし大島村名切の人、松枝惣十郎氏より貝塚の存在を聞きて調査せるものにして鳥居氏は該地に於ける名切街道に接する遺跡地域中、最低地の一區劃を試掘して貝殼、土器、獸骨片等を獲、地表より一尺五寸にて砂地に達せしと云ふ。

(2)該遺跡所有者松枝氏は爾來屢々小發掘を試み人骨數多を得しが、大正四年六月同郡神島製練所の開設に當り、衆庶の展覽に供すべく氏は其の人骨を携帶して出陳せり。時に京都帝國大學の小川博士は其の遺物を視て、研究的發掘を行はしめん爲、内田寛一氏を出張せしめたり。内田氏は二體の人骨及び共存遺物を帶歸して調査の結果を同年十月十六日の史學研究會例會に於て發表せしに、當時未だ石器時代人骨の研究の氣運起らず、且つ文學博士喜田貞吉氏の反對説等ありし爲め、氏は一時其の研究の續行を中止するに至れり。されど内田氏によりて層位的

研究の端緒を開き、一方河内國府の人骨出現に及びて、再び本貝塚が學界に注視せらるゝに至りしは氏の努力の効空しからずとすべし。此の間の消息に就ては「民族と歴史」第二卷第五號の「津雲貝塚發掘史」に喜田博士の詳細なる辨明あり。

(3)津雲貝塚に關して從來雜誌、新聞紙等に發表せられし報告の主なるものを擧ぐれば左の如し。

鳥居　龍藏氏「人類學上より見たる吉備地方」(大正四年二月山陽新聞所載)。
內田　寛一氏「注意すべき京大新研究」(大正四年七月大阪朝日新聞所載)。
同　氏「岡山縣大島村貝塚と其の人骨」(史林一ノ一、史學研究會例會記事)。
松本彦七郎氏「津雲介塚先住民の第一印象」(動物學雜誌三三五)。
同　氏「津雲人種の肢骨」(同　三三七)。
同　氏「津雲人種の頭骨」(同　三三八)。
同　氏「津雲人種及アイヌの眉」(同　三四五)。
京都帝國大學考古學研究報告第二册。
岩井　武俊氏「吉備路の昔」(大正七年四月大阪毎日新聞所載)。
長谷部言人氏「石器時代遺跡行脚」(歴史と地理四ノ五)
喜田　貞吉氏「津雲貝塚發掘史」(民族と歴史二ノ五)
大串菊太郎氏「津雲貝塚及河內國府石器時代遺跡に對する二三の私見」(民族と歴史三ノ四)
清野　謙次氏「津雲貝塚の發掘」(大正八年十月五日大阪朝日新聞所載)。
島田　貞彦「津雲貝塚の發掘」(大正八年十月十三日京都日ノ出新聞所載)。

第二節　貝塚の地形　〔圖版第一—第三〕

貝塚所在地は笠岡町の東南約一里、大島村大字名切小字を津雲と呼ぶ。北方に丘陵を負ひ、名切街道に面する緩傾斜の地にして、前に冲積平野を望む。此の平野は元と海底なりしが、自然的人爲的に陸化して、今日の如くなれるは、其の地形上より見て明なり。(1)卽ち貝塚所在地は現時海岸線を距ること數町の處にして、石器時代に於いては、全く海岸に濱せしものなるを想像するに足る。

清野博士の發掘せる地點は、前記緩傾斜面の北端に存する松枝惣十郎、服部照次兩氏邸宅の前庭とも云ふ可き場所を中心として、東隣なる柑橘畑に及べり。此の傾斜地は其の勾配必しも急ならず。卽ち今ま假りに名切街道を零(2)尺として計るに、發掘地點は高さ約九尺、遺跡地の東北端の池堤下は高さ十四尺を算すべし。卽ち其の兩端距離約三百尺に對して十四尺の高差を見るのみ。柑橘畑を爲せる東方の地域は、比較的地形の原狀を殘せるものなる可きも、西方家屋の前面に在りては、耕地並に居宅地の經營上、地形の變改されたるものある可く、以前は此の部分に於いて、現狀より更に幾分の傾斜を加へたるものありしを想像すべし。

尙ほ又た、今回發掘地域を通觀するに、貝層は西北部に厚く、西南部に至るに從ひて漸く淺きを見るべく、或は全く其の存在を認めざる地區さへこれあり。又た遺跡地は現今表面は畑地となりて平滑なるも、次節述ぶるが如く、人骨の埋葬層位の階段狀を爲せる等より考へて、當代には地形も亦た多少の階段狀をなせるものなることを想像せしむるに充分なるものあるを見る。貝塚の表面は貝殼の散布せるもの稀にして、一見貝塚たるを知ること難し。而かも街道に近く人家の前庭と覺しき此の傾斜地の畑中に、斯の如く多數の人骨を包藏せるものあるを誰人か之を想像し得可き。

清野博士は大串、長谷部兩博士に次ぎて三回の發掘を試みられたるが、其の地域は圖版第二に之を示し、第一次はA B、第二次はⅠⅡ、第三はa b等の文字を以て其の地區を記せり。此の三回の發掘中第一、第三の兩次は余輩之に參加せざりしを以て、其の發掘の記事は清野博士の手稿を以て之に代ゆることゝせり。

【註】(1)地理學的見地より此の地形を見るに淺口、小田兩郡の南部を通ずる山陽本線は、著しき斷層の低地を縱走せるものにして、此の線路以南の龍王山臺地は過去の地壘にして嘗て此の低地は海水の圍繞せしものなりしは地質圖によりて想像するに難からず。而かも此の臺地は西端に於て多數の小岩塊に分裂し、卽ち兒屋島、横島、片島、木ノ子島、神島等を生成せり。神島と西大島との中間に存する新田地は斷裂地を流るゝ河川の冲積作用を受けて生成せる部分に屬し、其の開拓の比較的新しきは地名に依りても明なり。されば石器時代に於ては其の入江が更に字名切の南端標高五乃至十米突の地にまで侵入し、東西線千七百米突南北八百米突の一大灣入を爲せしものゝ如し。卽ち該貝塚の位置は當代に於ては海岸に濱せしものにして標高約十米突の地にあり。

(2)圖版第二の發掘地域圖中□印を以て其の標高を示せり。

第三節　第一回の發掘　〔圖版第二及第三〕

第一回發掘は大正八年九月六日より同十三日に至る約一週間なり。高取輝雄氏の大なる盡力により、余(清野謙次)及清野泰が松枝惣十郎氏助力の下にて發掘し、人骨總て十一體を獲たり。

當初地域を發掘せしが、表土約七寸の下には一尺乃至一尺五寸の有機層あり。主として彌生式土器破片を出す(少數の祝部土器片を混ず)。貝層は厚くして北より南に向ひて緩く傾斜し、其厚さ一尺五寸乃至二尺なり。人骨は地表下四—五尺の部より三體を出たせり。B地域の地層狀態は第二回發掘地域Ⅴ及Ⅳに略等しきが故に之れを特記せず。此部より三體の人骨を出せり。C地域よりは五體の人骨を出せり。貝層の厚さ一尺五寸內外なり。地層の狀態は第二回發掘地域Ⅲ及Ⅳと略同樣なり。

出土遺物の主要なるものは土器破片なり。貝層深部より主として簡單なる紋樣ある粗雜の土器を出し、貝層中部より上部に亘りて之れに交ふるに稍複雜なる紋樣ある土器を以てし、貝

層上の有機層より定型性(比較的新らしき)彌生式土器を出す。土層は後世攪亂せられたる形跡なきが故に、此狀態を明に觀察し得可し。

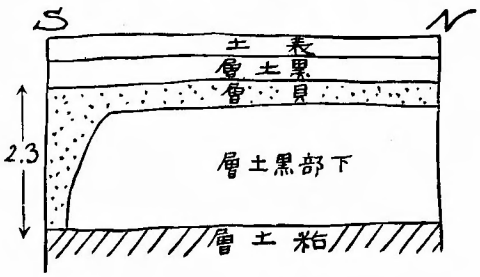
石器は少數出でたり。打製石包丁二個・石鏃數個なり。獸骨・鹿角・鳥骨・魚骨は多數存せり。注意すべきは貝層より出づる鹿角の切斷端は鈍器石器にて幾度も打たたきたる形跡あるに反し、貝層上の有機層中に、彌生式土器等と交はり出づるものは甚だ鋭利なる器物(恐らく金屬器)にて切斷せられたる形跡あることなり。(清野)

第四節　第二回の發掘　〔圖版第二及第三〕

第二回の發掘は大正八年九月廿一日より同月三十日に及び、清野博士を主とし、高取輝雄君及び余輩之に參加せり。運日六人の人夫を使役し、Ⅵ區より㈫區に亙り、發掘地域約六十坪に及び、人骨を發見すること三十餘體に達せり。

Ⅳ區は第一次發掘のCB兩區の中間に在り。表土の厚約一尺、獸骨、貝殼、土器破片を包含す。次に黑質の有機層あり、厚約五寸。彌生式土器の其間に存するものを見たり。(表面より深一尺二寸)次に貝層あり。其の厚一尺內外に及ぶ。人骨四體を此の貝層中より發見せり。貝層の下部にも亦た黑土層あり。地表より深さ三尺にして自然の粘土層に達す。この層中には何等人類の遺物を發見せず。然るに本區の南端に於いては、下部黑土層を見ずして直に粘土層に達せる處あり。(第一圖)斯の如き貝層の急激なる落差は、決して偶然のものに非ずして、恐くは石器時代に於いて、此の地點の

Fig. 1　第一圖



階段狀をなせるものありしを語るものならん。

V區は第一次發掘のB區の東に接せる處にして、表土七寸黑土層約七寸、人骨二體を發見す。其の一は全く黑土層中にあり、他（第十七號）は其頭蓋附近に約六寸の貝殼を包含せる層あるも、其の量至つて少なし。VI區は表土約八寸、黑土層一尺七寸あり。黑土層中より凹石錘石を發見せしも、人骨は之を發見せざりき。VII區は表土約一尺あり。深さ五寸の處にて稍完形の高杯を發見せり（圖版第二四6）黑土層は約一尺あり。その內より五個の人骨を發見せしも、其の一（第十九號）を除きては頗る完好ならず。此の區域に於いては貝殼片を發見すること殆ど無く、石鏃凹石等を獲たり。表面より深さ二尺にして粘土層に達す。

VIII區はC區の南にあり。表土六寸黑土層約八寸、貝層約一尺。二個の人骨を發見す。共に貝層の內にあり。その一個（第廿三號）は右腕に貝輪一個を嵌し、又た其の腰椎部に弓筈形角製品（圖版第二二4）を發見せり。IX區は表土約六寸、黑土層約八寸、貝層一尺餘あり。貝層中より二個の人骨を發見す。其の一（第廿六號）は乳兒の遺骸にして、口徑一尺二寸、高一尺二寸の粗質の壺中に收む。斯の如き壺中に小兒の屍骸を容るゝことは、先史時代の埃及にも其の例多く、本遺跡に在りても、大串博士の發掘に一例あり。[1] X區は表土約八寸黑土層約六寸、貝層は貝殼を包含する量頗る微小にして、殆ど黑土層と大差無し。人骨四體貝層中より發見せらる。內一（第三十四號）は小兒の頭蓋の破片等に過ぎず。又た黑土層中より鹿角製針一個を發見せり。XI區は表土七寸、黑土層六寸。貝層は貝殼を包

含すること頗る微量なる前區と殊ならず。此の層中三體の人骨を發見す。

XII區は表土約八寸、黑土層二尺。貝層に當る部分は全く貝殼を含むことなく、表土より二尺七寸にして自然の粘土層に到達す。黑土層中より一體の人骨を發見せしが（第三十五號）其の左腕八枚右腕七枚の貝輪を嵌裝せることは、罕に見る所に屬す。又た其の頭蓋左耳邊に、鹿角製の耳輪を有せしこと其の後整骨の際發見せり（圖版第二二3）これ亦た本遺跡に於いて、嚮さに大串博士の發掘に於いて一例を存するのみ。[2] 石鏃二個鹿角製針一個、黑土層中より發見せらる。XIII區は表土約一尺、黑土層以下貝層を存せず。黑土層中二個體の人骨を出だず。內一體（第三十五號）は他の諸例の悉く屈葬なるに似ず。伸展葬なるを注意す可し。

Fig. 2　第二圖

XIV區は南北に亙る一縱線を劃して、其の層位を明にせんが爲め發掘せるものにして、表土九寸、黑土層三寸貝層四寸、あり。貝層中より二體の人骨並に錘石、石鏃、各一個を發見せり。XV區は表土八寸、黑土層六寸、貝層は貝殼の含量微少にして東南に至るに從ひ、益々稀薄なるを見る。人骨を發見すること七體。多くは貝層中に存せるも、其の一（第四十四號）の如きは自然粘土層中に突入せるを見る。又た注意す可きは一個の伸展葬體（第四十三號）を中斷して、其の上に一個の屈葬體（第四十一號）あること是れなり。蓋し後者は前者より稍々古き時代に葬られたるものならむ。又た一體（第四十四號）は他の諸體よりも一層深き層位に存せるを發見せり。清野博士が第三次の發掘に於いて、本區に隣接せる地區に於いて、同じく二體の人骨（第五十號及第五十五號）が深

地區別	表土	黑土	貝層	下部黑土	粘土層
IV	0—1.0	1.0—1.5	1.5—2.5	2.5—3.0	3.0—
V	0—.7	.7—1.4	1.4—2.0	2.0	
VI	0—.8	.8		2.5	2.5—
VII	0—1.0	1.0		2.0	2.0—
VIII	0—.6	.6—1.4	1.4	2.5	2.5—
IX	0—.6	.6—1.4	1.4—2.6	2.6	2.5—
X	0—.8	.8—1.4	1.4	2.4	

地區別	表土	黑土	貝層	下部黑土	粘土層
XI	0—.7	.7—1.3	1.3—1.8		
XII	0—.8	.8		2.7	2.7—
XIII	0—1.0	1.0		2.5—	
XIV	0—.9	.9—1.2	1.2—1.6	1.6—2.4	2.4—
XV	0—.8	.8—1.4	1.4—2.0		2.4—
XVI	0—.6	.6—1.4	1.4—2.3		

（表土上より計測寸尺にて示す）

層に葬られたるを發見し、此の地點の一の階段狀を呈せしものありしを想定せられたるは、頗る穩當なる所見とす可し。又た先きにⅣ區に於いても貝層と黑土層との差著しきものあるは、余輩の述べたる所にして、本遺跡地は當代に於いて數段のテレースを形成せしを推測せしむるに足るものあり。(4)（第二圖）本區に於いて又た左右兩腕に各二個の貝輪を篏裝せし人骨一體（第三十八號）と一種黝青色の漢式土器に似たる破片を人骨存在の層位中より發見せしを注意す可し。

Ⅻ區は表土約六寸、黑土層八寸、貝層約九寸あり。一體の人骨及び錘石二個を貝層中より發見し、黑土層中より素燒土製の紡錘車、土偶破片(?)一個を獲たり。

【註】(1)大串博士の發掘に於いて壺中に存せる人骨ありしことは「民族と歷史」（第三卷第四號）にあり。卽ち大正八年七月、同氏の第三回發掘の際に於ける第六號人骨はこれにて口徑約一尺四寸の壺中に乳兒骨を納めたるものなり。

なほ我が石器時代に於ける此の種葬法の存在の紹介せられしものに、陸奥國南津輕郡北中野村天狗岱及び陸前國氣仙郡末崎村細浦の遺跡の二例あり。前者は大正七年、笠井新也君の調査に係り、其の詳細なる報告載せて「考

古學雜誌」第九卷第二號にあり。後者また同じ頃本山彦一君の發掘せしものにして、甕に小兒の遺骨を藏めたりと云ふ（喜田博士「石器時代の墳墓に就いて」考古學雜誌第九卷第三號）。喜田博士は其の「古代アイヌ族の墳墓」（歷史地理第三十二卷第六號）に於いて、此の葬法を論じて、アイヌ族の葬法の一なりとせり。

又た埃及王朝以前の屈葬墓地に於いて、小兒の遺骨を壺中に藏むこと多きは、G. A. Reisner; Early Dynastic Cemeteries of Naga-ed-Dêr, I. (Leipzg, 1902)等を見よ。

（2）醫學博士大串菊太郎君「民族と歷史」（第三卷第四號）前出論文。

（3）屈葬は死者の臨終未だ絶息せざるに先ち或は死後間もなく肢體を屈曲せしむ。若し其の機會なくして强直後なる時は例外として伸展葬を行ふこと、現代蠻族中に其の風あり。（本報告第四册、第三章參照）

本遺跡地に伸展葬のもの例外として二三あることは、斯の如き例外の場合に葬られるものなる可く、直に以て當代屈葬法以外に伸展葬を風習として行ひしを、推測す可からざるに似たり。

（4）本册清野博士論文中「出土地層及埋葬時代に關する考按」の條參照。

第五節　第三回の發掘　〔圖版第二及第三〕

第三回發掘は大正八年十二月末より、大正九年一月初めに亘れる約一週日に擧行せり。主として從事せしは、清野泰及岸田宗一氏及余（清野謙次）なりしも、濱田氏亦一時之れに參加せり。其服部照次氏の助力を得たるもの多し。

〔第一〕先づ第二回發掘地の南方地續きを(a)(b)(c)地域の順序にて發掘せり。此地は貝層に乏し。殊に(a)及(b)地域の大部分は貝層を見ずして、地表下一尺六七寸の間は有機層あるのみなり。而て有機層の下部より人骨が現はる。然れども(b)地域の西半部より(c)地域に亘りては貝層が存在し、(b)地域にては殆んど層を成さざるも、(c)地域西部にては約五寸の厚さとなれり。但(a)地域の北部に於ては、有機層は甚だ厚くなりて、二體の人骨（第五十五號及第五十六號）は地下二尺五六寸の所より現はれたれど、兩地域共に其南方に至るに從ひて淺くなり、地下一尺の所より

人骨が現はる。こは是等人骨が略同一水平面に存在せるに拘らず、此部の畑地表面は南方に傾斜せるがためなり。而て人骨第四十四號・第五十號・第五十七號を連ねる線は其北方に存在せる人骨存在面に對して約一尺五寸の落差を示せり。尙此事につきては人骨出土篇中に述ぶ可し。

(a)(b)(c)地域の出土遺物中には注目に價するものなし。(b)地域の南部に於て表土に近き有機層中より、彌生式土器(赤燒)小吸壺胴部を出せる外、土器破片が少數存在せしのみなり。

其の後ち長谷部氏が(a)(b)(c)地域の南方地續きを發掘せし狀態を榊原氏より聞くに、同氏發掘地の東部に偏して人骨ありしが、淺き地層中に存在せるにより破損せり。同氏地域には西部に人骨を見ざりしと云ふ。

〔第二〕斯くの如く西部に至るに從ひて漸次淺くなり、且人骨數も乏しくなりしが故に、余等は(d)(e)(f)(g)(h)地域の順序に(此中(h)地域は第三回發掘の最終日に發掘せしものなれども便利上茲に併せ記せり)發掘を行へり。此地域群中の北部より三體の人骨(第六十一號・第六十二號・第六十三號)を發見せし外、(d)地域の中央部に於いて他の人骨より離れて一體(第六十號男性)を出せしは注意を要す。

此地域群の所見を記せんに(e)地域にては畑地表面下數寸の所より初まりて、一尺乃至一尺五寸の有機層あり。其下には一尺計の貝層ありて、人骨は地表下二尺乃至二尺三寸の地下より出づ。南方(f)(g)地域に至れば貝層は漸次菲薄となる。卽此の兩地域の北部にては貝層は約一尺の厚さを示せども南端に至れば二寸或は其れ以下となれり。之れに反し貝層上の有機層は北部にては二三寸なれども、南部には一尺五寸あり。而て地表より其層下有機層の盡くる部邊は

二尺乃至三尺弱なり。遺物に乏しくして、少數の土器破片と、(e)地域北部にて、直徑三寸許の略完全なる彌生式皿形土器を出せしのみなり。

〔第三〕斯くの如く上記地域群の發掘成績は失敗に歸せしにより、余等は更に(i)地域を發掘せり。北部には地表下一尺弱より始まれる一尺五寸許の厚さの貝層あり。人骨を出さざりき。又遺物としては、少數の土器小破片と、磨製石斧破片一個を出せしのみなり。

此地の東方に接せる細長き長谷部氏發掘地帶より、同氏は人骨五體を發掘せりと云ふ。但五體共東に接して現はれたり。恐らく同氏の五例は余等が第一回乃至第二回發掘地の最西端に位せるものなるべく、之れより西方には人骨は埋葬せられ居らざるものゝ如し。されど貝層は(i)(f)(g)地域を越ゑて西及南の畑地迄連續せり。

從て余等は津雲石器時代墓地の西南部を、不完全ながらも發掘し了りたる理なり。されど墓地の西北端は松枝氏邸宅なるにより、今日到底發掘し得ず。從て余等は止む無く東北部を發掘せり。而て東方に於ける大串氏發掘及長谷部氏發掘地は失敗の歷史ある部分なり(大串氏は人骨を得ず。長谷部氏は三體を獲たるも淺在なりしため不完全なりき)之れ墓地東部の土壤は、更らに東方に存在せる貯水池の堤防を築造する際、運び去られて、埋葬人骨は消失せしか、又は淺在となりたるがためなり。

余等が(j)地域の南半部は地表下數寸にして原土に達す。此間有機層ありて、土器小破片を發見せしのみなり。此半部には貝層が存在し、北端に近づくに從がひて漸次厚くなりて貝層は約一尺に達せり。而て此地域の東北部より第五十五號人骨が現はれ、之れと僅かに四尺を距てて

第六十六號(小兒骨)あり。後者より前者は一尺五寸餘深部に埋沒せられ居れり。尙此事につきては後篇別に記述す可し。

此他余等は長谷部氏第一回發掘地の東北方を試掘せしが地下數寸より。第六十四號骨現はれたり。破壞散亂せる成年人骨なり。僅かに五尺四方の發掘にて中止せり。此部の貝層は地表下三四寸に初まり厚さ一尺內外なり。貝層中にマキ貝多し。(清野)

第二章　發見の遺物

第一節　石器及骨角器　〔圖版第二二―第二四〕

津雲貝塚に於ける發見の石器類は土器に比して其の量多からず。今次の發掘を通じて得たるもの僅に十數個にして、錘石大部分を占め、石鏃これに次ぎ、外に石匕一個、圓石一個及び砥石一個なり。石斧は磨製の小破片を發見せしのみて形明ならざるも、同地松枝氏の採集品中には、根棒形の磨石斧の頭部を藏し、長谷部博士また其の第二回の發掘に於いて同遺品を獲たるを以て、略ぼ其の型式を類推し得べし。

是等の石器中、石鏃は其の數四あり。何れも砂岩(sand stone)を打ち缺けるものにして、製作粗なり。形の全きは一個のみなるも、何れも柄なき型式の如く、三個は三角形に近く、他の一は雁俣形に屬するものなり。石匕一個同じく砂岩より成り、堅型にして其の柄は稍一方に偏して存せり。刃の部分の一面は大なる打缺き面の儘を利用して、他の一面にのみ更に細かき打缺き齒を加へたり。これ亦製作特に巧妙と稱す可き程度のものにあらず。(圖版第二二下)

錘石は概ね徑二寸內外、厚さ三四分の扁平なる圓石を用ひ、その前後兩端に小打缺きを作れるもの、石材は砂岩多きも、また輝石(pyroxenite)を使用せるも見たり。(圖版第二三下)砥石は長徑一尺、高さ最も大なる部分五寸に達する不整形の花崗岩にして、其の廣き上下の兩面は共に磨研の爲彎曲し、側面の一また磨研せる形跡をとゞむ(圖版第二三上)。石質堅緻と云ふ可らざるも、これより推し

て、恐らく磨石斧等を作るの爲使用せるものと考へらる。圓石一個は徑三寸、高さ一寸五分の花崗岩(granite)なり。底面を磨して安定を得せしめたると共に、其の面の中央と上端とに各一個の小凹所を作れるもの、從來凹石なる名稱を以て呼ばるゝ石器の一變形なり。

以上器物の外發掘地域より打缺きの石屑片を發見せり。大部分は砂岩にして石鏃等の材料石と思はるゝが中には變質珪岩(hornfels)の片も存せり。是等の石屑中圖版第二三の8に示せる一の爪形のものゝ如きは肩部の打缺き略ぼ成りて、或用途に供せられしかとも覺ゆるものあり。此の遺跡に於ける石器製作の事實と其の順序を推し得べし。

石器の外角骨製の裝飾品あり。卽ち第三十四號人骨の左耳邊に存在せし耳飾(圖版第廿二3)第三號及び第五十三號人骨の腰部より發見されたる裝飾品(1同上2)第十一號人骨の左腕に接して發見せられたる裝飾品(5同上)第二十三號人骨腰部に存在せし矢筈形のもの(4同上)あり。又た骨製釣針(6同上)あり。貝輪の人骨腕部に篏裝發見せしものゝ外、其の未成品及破損品數個あり。此等に關しては清野博士の論文中に詳述せられたるを以て今は省略に從ふ。(梅原)

第二節　土器の種類及形式

〔圖版第二四—第三三〕

津雲貝塚より發掘せる遺物中、人骨に次ぎて重要なるものを土器となす。其分量に於いても遙に石器等を凌駕し、各種の土器稍異なる層位に於いて發見せらるゝは、土器の系統、年代、製作人種等の問題を研究するに最も緊要なる事象なりとす。次に余輩は先づ此等土器の種類及び形式に就きて述ぶる所あらんとす。

土器の種類は祝部、彌生式、及貝塚式の三者を併存すること、河内國府の遺跡に於けると殊ならず。[1]就中祝部土器は僅に其の破片數個を得たるのみにして、杯、蓋杯及び壺の口部と認めらる。黑土層より之を發見し、貝層中には絶對的に見ること能はざりき。

彌生式土器は是れ亦た黑土層中より發見せらるゝのみ。其の數量貝塚土器に比して、遙に少きも、祝部土器に比して多量なり。茶褐色の素燒にして、比較的軟く、高杯の脚部大部分を占む。而かも其の形式聚成圖錄二六五、二七一等に見るものに酷似[2]し、圓孔を脚部に穿てるもの多し。大さは大ならず、破片により推測するに、原高四寸前後のもの最多數なるが如し。高杯以外には壺鉢の頭部の破片あり。比較的薄手にして、表面に附するに刷毛目を以てし、又た篦を以て磨琢せるものあり。此等破片以外に彌生式土器の系統中に屬す可きものとして、二個の稍々完全なる小器を得たり。一は頭部に缺損あるも、聚成圖錄一一六に近き形にして、腹徑二寸五分あり。表面は粗糙なるも轆轤製なるが如し（圖版第廿四2）又た椀形の小器あり。口徑一寸二分、高一寸あり。表面に粗き刷毛目を有す（3同上）又た一個の紡錘車あり。直徑一寸六分、厚六分、其の赤色にして黑土層より出でたるを以て考ふれば、恐らく彌生式土器に屬するものならむ。（4同上）

貝塚式土器は前二者に比して頗る多量にして、殆ど全部に近しと言ふを妨げず。黑土層中よりも發見すれど、貝層中に於いては殆ど全く他の土器を交へず、此の土器のみを出だす。其の質砂土を交へたる粘土より成ること、他の諸遺跡に於ける石器時代の土器と同じきは、天然の粘土を採り來りて、何等水漉し等の精製方法を加へざるに因る。貝塚式土器は之を其の形質紋樣等によつて、略ぼ三種に區別するを得るが如し。卽ち

(一)は其の製作最も簡粗にして、全く手ツクネに成り、表面粗糙にして不整形の篦目刷毛目等を有するを常とし、色澤は暗褐色を帶ぶ。第二十六號乳兒の人骨を容れたる壺は其の代表例にして、其他數個の破片あるも、分量多からず。(圖版第廿四上)

(二)は黑色を帶び表面磨研せられたる薄手の土器なり、其の口緣部の斷面後節(a)形式をなせるもの、及び其の系統に屬するものなり。此の種の土器は多量に存し、而かも貝層中に多くして黑土層に少なきを注意す可し。(圖版第廿六等)

(三)は褐色を帶ぶる比較的厚手の土器にして、口緣部は(b)(c)形式をなすもの多し。其の紋樣は絡繩曲線紋の系統に出るを常とす。貝層及黑土層共に多量を出だす。(圖版第廿八等)

破片の多數は口緣部及び底部に屬し、口緣部の形式に種々あるも、就中特に注意す可きもの二三種あり。(a)は前述(二)に述べる種類の土器に見る處にして「く」字形に外方に張出し、口緣に並行線を附するを常とす。(b)は(三)の種類に多く見る處にして口緣外部に紋帶を繞らし、其の帶部は外方に傾斜して附着せらる。此の口緣形式の變樣として、其の紋帶の器の內緣に附着せられたるものを(c)となす。(第三圖)

器の口緣部は水平なるもの多しと雖も、捉手の退化とも見る可き山形切り込みを有し、又たハ形に突角を有するもの少からず。(圖版第廿七46 59)斯の如く圓形の器緣が四邊形の隅角の如く突起せるは、日本石器時代土器に屢々見る處にして、彌生式土器等に於いて絕にて認むること無し。想ふに是は圓形の器上に方形の器を附着せる形より起りしものならむか。

器の底部は其の製作重厚なるを以て、其の遺存するもの比較的多きは自然の勢なり。而かも

此の部分には紋樣の應用なきを常とするを以て、往々彌生式土器のそれと區別し難きものあるを見る。然れども本遺跡に於ける器底部を仔細に觀察するに、其の貝層より發見せられたるものは固より、黑土層中發見のものと雖も、最大多數は其の土質製作等よりして、之を貝塚式土器の系統に入る可きものなるを知れり。而して其の形狀糸底部の缺如せるもの、之を存するもの、又た糸底部の平板なるもの、其の摺鉢形に凹入せるもの、帶狀をなすもの等に區別す可く、殊に後の二者は本遺跡に於いて顯著なるを見る。(圖版第三十及第三圖)

器の肩腹部は口緣部に比して薄くして脆弱なるを以て、其の破片小さくして、器の原形式を窺ふに資するもの多からず。完形を見る可きもの前記小兒骨を收めたる壺の外、たゞ一個の漸く全形を想像せしむ可きもの(第十圖)の外、稍々楕圓形に近き小器(圖版第廿四8)と、大なる凸帶を有して多面體の如き觀を呈せる器(圖版第廿四10)の破片等を特記す可きのみ。

捉手の部分は多からず。たゞ一個角狀の捉手あり(圖版第廿二145)。是は彌生式土器に於いて多く見る處なも、此の一例は貝層中より出でゝ形質共に貝塚式土器に屬す可きものと考へらる。又た瓶の嘴部數個あり。(圖版第廿二下)其の一は長大にして長さ約五寸に至る。土瓶形の遺品の本遺跡より出でたるもの一個、松枝君の藏品に是れあり、又た土偶の破片若しくは捉手かと思はるゝ異品一個あり。(圖版第廿四7)從來關西方面の貝塚より土偶の發見せられしを聞かず、遽に土偶と認め難きも疑を存して之を記す。(3)

最後に特記す可きは、貝塚式土器中、第二類に近き磨研せられたる表面を有し、黝黑色薄手の土器片なり(圖版第廿二138)。是は貝層中より發見せられ、土質は精緻にして砂土を交へず。水漉しにし、轆

轆を以て製せられたるものゝ如し。其の形狀亦た整好にして、口緣部の形狀及び其の凸帶を有する等、聊か支那漢式の瓦器に類す。[4]小破片に過ぎざるを以て、其の本質を明にする能はず。或は貝塚式土器中の一變種なるやも知らざれど、未だ其の確信を得ず。後の研究者の爲め之を注意し置くことゝせり。

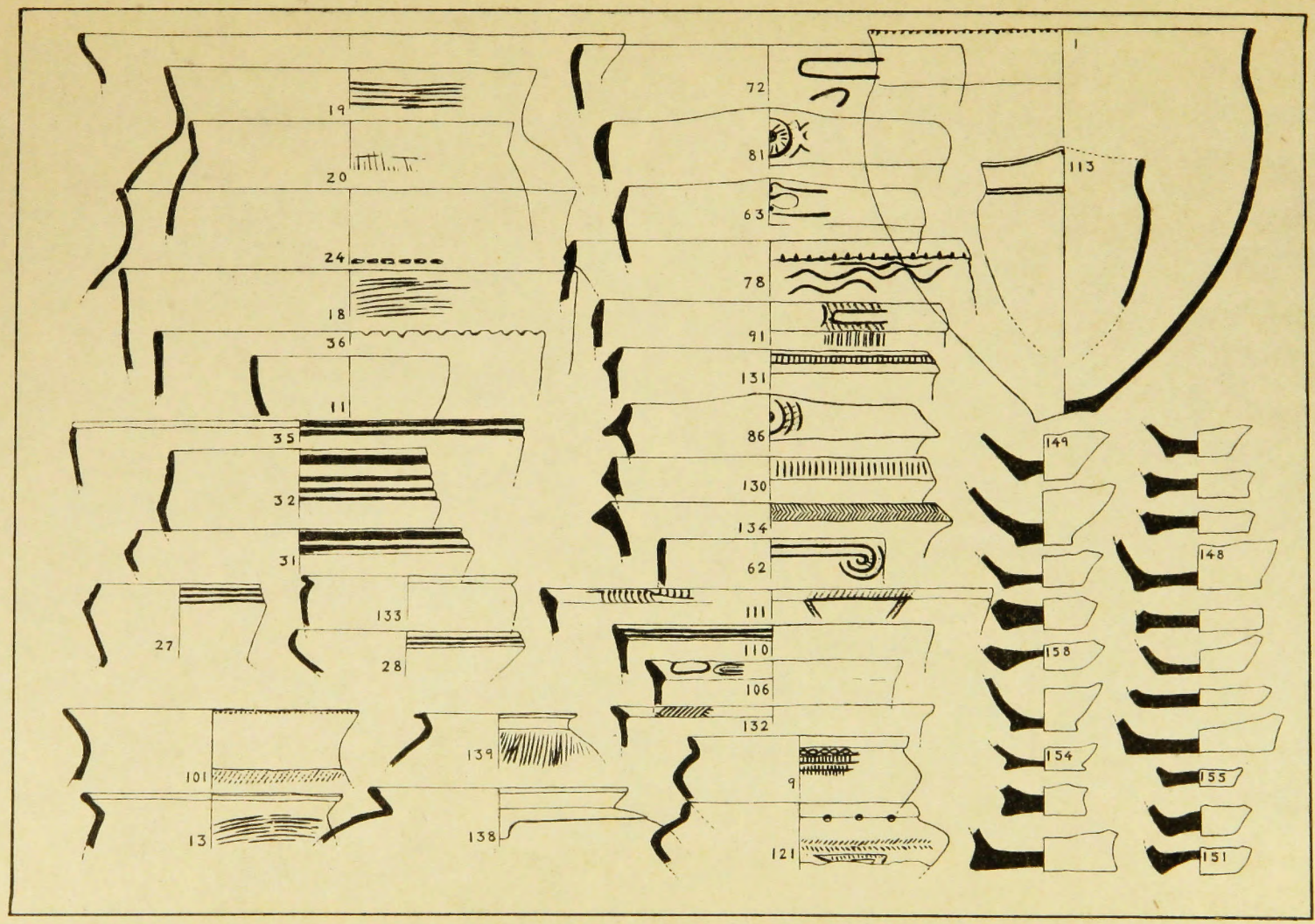
【註】(1)本報告書第二册第五章參照。
(2)同第三册附錄「本邦彌生式土器形式聚成圖錄」參照。(以下之に同じ)
(3)石偶は大隅國姶良郡福山村大字福山の石器時代遺跡より發見せられたり。(山崎五十磨君「大隅國福山村石器時代遺跡より發見したる石偶に就て」考古學雜誌一〇ノ六參照)
(4)漢代瓦器に就いては Laufer, Chinese Pottery. (Leiden, 1909) 等を見よ。南滿洲、朝鮮大同江附近古墳よりも發見せらる。

第三節　土器の紋樣　〔圖版第二四ー第三三〕

津雲遺跡發見の貝塚式土器の紋樣は、大體に於いて頗る關東地方の貝塚式土器のそれと酷似せるを注意す可く、其の應用は口肩部に最も多く、大多數は沈紋にして浮紋は其の例甚だ僅少なり。今ま其の種類を分つに、

(イ)繩席紋　比較的細小なる繩紋にして、其の種類五あり。孰れも稍々不規則に押捺せらる。繩席紋は獨立に器上に汎く應用せらるゝもの、外、他の紋樣の上に添加せらるもの少なからざること後述の如し。(圖版第廿五上)

(ロ)絡繩曲線紋　是は第三類の土器に附せらるゝものにして、其の起原は繩を以て土器の上を縛したるより出でたる裝飾を名く。土器の口緣部には水平線狀に並行せる線あるも其の要處



第三圖 津雲發見土器形式圖

Fig. 3. Forms of the pottery found at Tsukumo. (Shimada)

には繩の結目より出でたる圓、同心圓的の結節を示す。器腹には如上の口緣部の並行線と連續せる對角線、或は垂直線的に出でたる紋樣を有するを原則とし、此等の並行線の間に繩紋を添加し、其の繩を絡みたるを示すを常とす。こは東部日本石器時代の土器に最も普通に見る處の紋樣の一にして、又た世界各地の古代土器に於いても、土器使用自然的發達の道程として類似の裝飾を見る。又た此の系統の裝飾は複雜なる發達をなし、終に其の起原を窺ふこと能はざるに至るもの尠からず。或は繩紋を缺き、單に曲線のみの發達をなすものあり。津雲土器に於いても此の紋樣は尤も多く行はれたるものゝ一なれど、比較的簡單にして、僅に口緣部に並行線と繩紋あり、同心圓乃至圈點の結節を示すもの多し。されど器腹に亘りて絡繩的紋樣の連續せるものなきに非ず。（圖版第廿八、廿九等）

（ハ）帶狀並行直線紋　是は第二類の土器に附せらるを常とし、器の口部肩部に一條乃至數條の平行線を帶狀に繞らすものにして、亦た同じく繩紐の類を以て此の部分を縛せるのモチーソより生ぜるものにして、其の尤も形式化せるものならむ。此の並行線帶の要處に、時に凹壓の圈紋の存することあり。其の繩の結目より出でたること言ふを俟たず。此の類の紋樣は津雲土器中前者と共に尤も顯著なる存在を認む可し。（圖版第廿六等）

（ニ）各種幾何學的紋樣　口緣部の凸帶上に竪、横或は鰯骨狀に直線紋を適用したるものあり。更に簡單に點を連ねたるに近きものあり。又た梯子狀のものあり。此等は皆な同じく絡繩等の意義より出でたるものなる可く、其のうち薩摩指宿發見の彌生式土器の層位より出でたる土器のそれと相類するものあり。[1]（第圖三）

(ホ)隆起帶狀紋　帶狀に隆起せる紋樣を並行せしめたるものにして、肥後轟貝塚に多く見る處のものに屬す。[2]此の類の紋樣を有するものは、只だ一片を獲たるのみ。

(ヘ)指紋　指頭を壓捺して紋樣をなすものにして、帶條紋の要部に之を置くの外、連續して使用せらるゝことあり。土器製作者が繩席紋篦紋等の外に、尤も自然的裝飾を行へるもの、爪形紋と同一意義を有す。但し爪形紋は未だ津雲に於いて發見せられず。(圖版第廿九、93 97)

(ト)介殼紋　アカゞヒの如き貝殼を壓して紋樣をなし之を連續せるものにして、最も巧妙なる美術的意匠なりとす。此の類のもの僅に一片を得たるに過ぎざるも、長谷部博士は類品を發見せられたり。[3]又た中國地方の遺跡に這種の紋樣往々にして存在することは屢々報告せらるゝ處なり。(圖版第廿九 89)

以上は主要なる紋樣及び特記す可き紋樣にして、其他特殊のものは圖版上に之を示したれば今ま一々之を述べず。又た土器の紋樣は器の表面に適用せらるゝを常とせるも、口開大なる器に於いては口緣內部にも往々附せらるゝは、我が石器時代土器に屢々見る處なり。津雲に於いても此の例屢々あり。其の種類は絡繩系統のもの及び簡單なる直線等なり。(圖版第三〇下)

【註】(1)大正六年同七年濱田耕作調査研究に據る。なほ山崎五十磨君の「アイヌ式彌生式土器及石器等を包含する遺跡」(考古學雜誌八ノ七)なる報告あり。

(2)本册轟貝塚報告第三章參照。

(3)大正八年十二月長谷部博士發掘の際獲る所の遺物に之を見る。

第四節　土器と發見層位

已に述べたるが如く、津雲遺跡に於いては、少許の祝部土器若干の彌生式土器、及び多量の貝

塚式土器を發見せるが、此等土器の存在する層位に關する精細なる研究は、土器の時代と其の製作者を決定する上に最も重要なる資料を供するものなることは言ふを俟たず。されば以下少しく之に就いて述ぶる所あらむ。

津雲遺跡を構成せる地層は、其の最上層は灰褐色の表土にして、年々畑地の耕作と共に攪亂せらるゝ處なり。其の厚さ六寸乃至一尺あり。往々少許の貝殼、土器破片、骨片等を包含するものあれど頗る微量なり。次に有機質の黑土層あり。場所によりて殊なるも、厚さ三寸乃至一尺を數ふ。此の層の上部表土に近く、彌生式土器を發見し、また微量の祝部土器を混ず。而して此の層の隨處に於いて多數の貝塚土器を發見し、此等各種土器の間に層位的區別を明にすること能はず。

次に貝殼層あり。其包含量に濃薄を殊にし、或は殆ど黑土と大差なきものあり。其の厚さ亦た各地域によりて相同じからざるも、概して北西に厚く東南に薄く、數寸より三尺に至る。此の貝層中よりは一二彌生式土器の疑あるもの發見せられたりと雖も、殆ど全部は貝塚式土器にして、祝部に至りては絶對に之を發見せず。又た貝塚土器中に於いても、前節之を述べたるが如く帶狀並行線紋を口部に有する種類のもの、黑土層に比して較々多量なるを認む。

貝殼層の下部に亦た黑土層あり。厚さは數寸內外にして自然の粘土層に達す。此の下部黑土層は固より上部のそれと同一性質のものにして、貝層は其の中間に介在して之を上下に二分するものと謂ふ可く、總て貝殼層の存せざる地區に於いては、黑土層上下に分たれずして、大なる厚さを有す。此の下部黑土層中には、貝塚式土器を存するも頗る微量なり。粘土層以下に於い

ては凡て人類の遺物を發見すること無し。

人骨は貝層中に存するを原則とし、時に黑土層中に發見す。石器は貝層及黑土層に存するも、寧ろ後者に於いて多數なるが如し。今ま左に各種土器の發見せられたる層位に就きて其の大數を表記せむ。

土器名稱	黑土層	貝殼層
祝部土器	5	0
彌生式土器	高坏脚類 27 壺鉢類 14 41	殆ど無し
貝塚式土器 第一類（素紋）	2	4
貝塚式土器 第二類（直線紋）	10	25
貝塚式土器 第三類（曲線紋）	42	15
貝塚式土器 底部	22	31

【備考】

一、貝殼層の存せざる地區に於いては之に準ず可き層位を貝層と見做す。

二、同一破片と認む可きものは一に數ふ。

三、把手瓶口等の類は少數なるを以て表中より之を省く。

四、本表の示數は第二回發掘のものに限る

以上の事實に本きて考察するに、人骨の貝塚式土器と共存せることは固より些の疑なし。卽ち此の墓地の被葬者が貝塚土器の製作者たりしを考定するに充分なり。而して貝塚土器中第一類の粗糙なる素紋式のもの、製作上より尤も古く、第二類直線紋のもの、貝層中に多く黑土層に少なきは、第三類曲線紋のものより稍々古きが如く推測せしむるものあれど、其の製作者の

間に差異ありとは思惟する能はず。今は等しく貝塚式土器として妄に分類せざるを宜とす可きか。而して黒土層中に貝塚式土器と共に存在する彌生式土器は、其の常に貝塚式土器よりも上位に存するの事實により、時代の彼に比して稍々新しきものたるを推察せしむ。然れども此の彌生式土器は、其の少量なる點に於いて、更に微量なる祝部土器と共に、其の製作者が貝塚式土器のそれと同一民族なりしや否やに就きては議論を生ず可し。此の遺跡のみに於ける事實を、他方面の考察を加へざるに於いては、之を同一民族が稍々新しき時代に於いて彌生式土器及び祝部土器を製作せりとの結論に歸着す可きのみ。余輩は今ま此の紛糾せる人種問題に接觸するを避けて、唯だ此の事實より歸着す可き自然的歸結を提出し置くに止めむとす。

第五節　貝類及獸骨

津雲貝塚を積成する貝類に就いては、早く松本理學博士調査の際採集せるものに關して、理學士嵯峨一郎氏の研究せる結果、載せて動物學雜誌第二十九卷第三百四十二號(大正六年四月刊)にあり。題して「津雲介塚の介類」と云ひ、類二十種を認めて、内今猶ほ疑問の一種を除く他の全部は現生種に屬するもの、而して Corbicula viola Pilsbry の淡水産を除く外何れも鹽水産なるも、この一種の現在津雲地方のシヾミと異なること、又或種の現生種と可成の特異あるを指摘して、Chlorostoma rusticum Gmelin, Arca (anomalo cardia) granosa Linné, Cytherea (Meretrix) sp. の三種の學術上の興味を說けり。

今回の發掘に當り、帶歸せる貝殼に就いて見るに、如上嵯峨學士の記述の範圍を出づる新種

を認め難きが如く、其の研究に多く加ふ可きものなし。從つて茲にはたゞ蒐集品に就いて平瀨貝館主任黑田德久米氏の鑑定に基き得たる種目を列記するにとゞむ可し。其の名稱の嵯峨氏と異なるは平瀨氏の規定に從へる結果なりとす。

(1) セタシヾミ Corbicula Sandai Reinhardt
(2) オキシヾミ Cyclina Sinensis Gmelin
(3) ハマグリ Meretrix meretrix Linne
(4) アサリ Paphia [Ruditapes] philippi narum Ads & Reeve
(5) ハイガヒ Arca [Anadara] granosa Linne
(6) オホノガヒ Mya arenaria japonica Jay
(7) ウチムラサキ(一名橋立貝) Saxidomus purpuratus Sowerby
(8) アカニシ Rapana Thomasiana Crosse
(9) スガヒ Turbo [Marmorostoma] Coronatus Gmelin
(10) カキ Ostrea [Lopha] gigas Thunberg
(11) レイシガヒ Thais bronni Dunker
(12) ウシノツメ Helcioniscus nigrotineatus Reeve
(13) サルボウ? Arca suberenata Lischke.

發見の獸骨は前後三回を通じて多量に上れり。されど其の大部分を占むるは鹿及び猪の二者にして、狐狸の骨片と思はるゝものまた往々にして混ず。中に就いて鹿の骨の各部のものを

存し、又其の叉角の斷片多く、後者には時に一定の長さに兩端を切り取れる遺品を見たり（圖版第廿三下段）是等の獸骨に就いては、松本（彦七郎）博士の嚮に此の遺跡にて採集せる標品に關する研究數次動物學雜誌上に[1]發表せられ、其の鹿は現生の種と大差なきも、猪はSus leucomystax gephyreus, subsp. nov. と名づく可く、現生種との間に相違の著しきものあるを注意し、また一種の小形の犬の上顎骨の破片を檢出して、其の特質に論及せり。今回得たるところの資料は、此の研究の範圍を出づるものにあらざるが如きを以て、單に其の種名を擧ぐるにとゞめ、詳しくは博士の論文に讓ることゝせり。（梅原）

【註】(1)松本博士の津雲貝塚出土の獸骨に關する研究は「津雲介塚先住民の第一印象」（動物學雜誌三三五號）「介塚の猪及鹿に二型あり」（同誌三三九號）「介塚の犬に二型あり」（同誌三四四號）等に見ゆ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

要之、津雲貝塚は近時本邦に於いて發見せられたる新石器時代墓地中最も重要なるものゝ一にして、其の葬法は河內國府陸前宮戶島等のそれと共に、等しく屈葬（contracted burial）に屬し其の土器の種類は、國府と同じく祝部彌生式及貝塚式の三者を併存し、而かも貝塚式土器は關東貝塚式のものと酷似するに係らず、彌生式は河內其他關西のものと全く同一なり。又た角製耳飾、腰部裝飾品等特殊のものを出せるは注意す可し。是が果して如何なる人種に屬す可きか、他の類似諸遺跡のものと同一人種に屬す可きか。或は同一人種にして混和人種の分量異なれるか。或は異人種に屬す可きか。是れ最も重大なる問題にして、其の考察は清野博士の整骨完成

後發表せらる可き研究の結果と、大串長谷部兩博士の研究の完成とを俟つて始めて試みる可きものなれば、今ま茲に之を論及せざる可し。たゞ既に發表せられたる松本鈴木兩博士の研究の結果によれば、二三の津雲人骨は廣頭的傾向あり。又た長谷部博士の調査を傳聞するに、河內國府型以外の一型ありと云ふを記し置くに止む。